

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第38号

2017年12月9日

シリーズ「マタイ受難曲と私」 第4回

三大宗教曲 それぞれの回想

アルト H. E

最近読んだ五木寛之の本の中に「回想のすすめ」という項があり、私もバッハの三大宗教曲についての回想なら書けるかも・・・と思って書いてみることにしました。

◦「ヨハネ受難曲の回想」

これはなんと言ってもヘルムート・ヴァインシャーマンの指揮、東京カテドラル聖マリア大聖堂でのコンサートでした。私にとっては2回目の「ヨハネ」でしたが、マエストロの曲の捉え方が大きくて暖かく、気持ちよく歌えただけでなく、終演後拍手の中で手渡された大きな花束を持ったマエストロが、何の疑いもなく私に近づいて、その花束を渡してくださったのです。私はただただ驚いてやっと「ダンケシェーン」といっておじぎをしました。その後も「ヨハネ」を歌うチャンスはありましたが、あの目白での感動にはほど遠いものです。

◦「ロ短調ミサ曲の回想」

このときのソリストは Sp. 藤崎美苗、Alt (カウンターテナー) 青木洋也、Ten. 畑儀文、Bs. 浦野智行、指揮は室伏正隆 (ムロチャン)、会場は紀尾井ホールでした。今の日本で一番のエヴァンゲリスト歌いは畑先生だと私は確信しております。メロディックにならず、テノールでも張り上げず、ナレーションに徹して品格があり、さすがドイツリートの名手だと思うのです。

指揮者の室伏先生は日頃、皆にムロチャンと慕われ、私などは「ゴルトベルク」や「平均律」について、時にはマーラーに話が及んだりしてとても楽しい時を過ごせました。

紀尾井ホールは満席になり、私の斜め前には浦野さんがおられて、それは本当に夢のようなステージでした。

◦「マタイ受難曲について」

この曲は私の原点であり、個人的にとっても大事な曲なのです。5回目ではありますが、今私が取り組んでいる曲なので回想ではなく「マタイへの思い」として書いてみようと思います。

何回やっても苦手なところを拭いきれなくて困っているのですが、No.62 のコラール “Wenn ich einmal soll scheiden” の後、場面は劇的に変化して復活を表す天変地異が起こり、次に No.63b の合唱 “Wahrlich, dieser ist Gottes Sohn gewesen.” が2小節だけ、だが、まさにこの2小節が曲全体の頂点となっていると思わせる素晴らしさで置かれています。

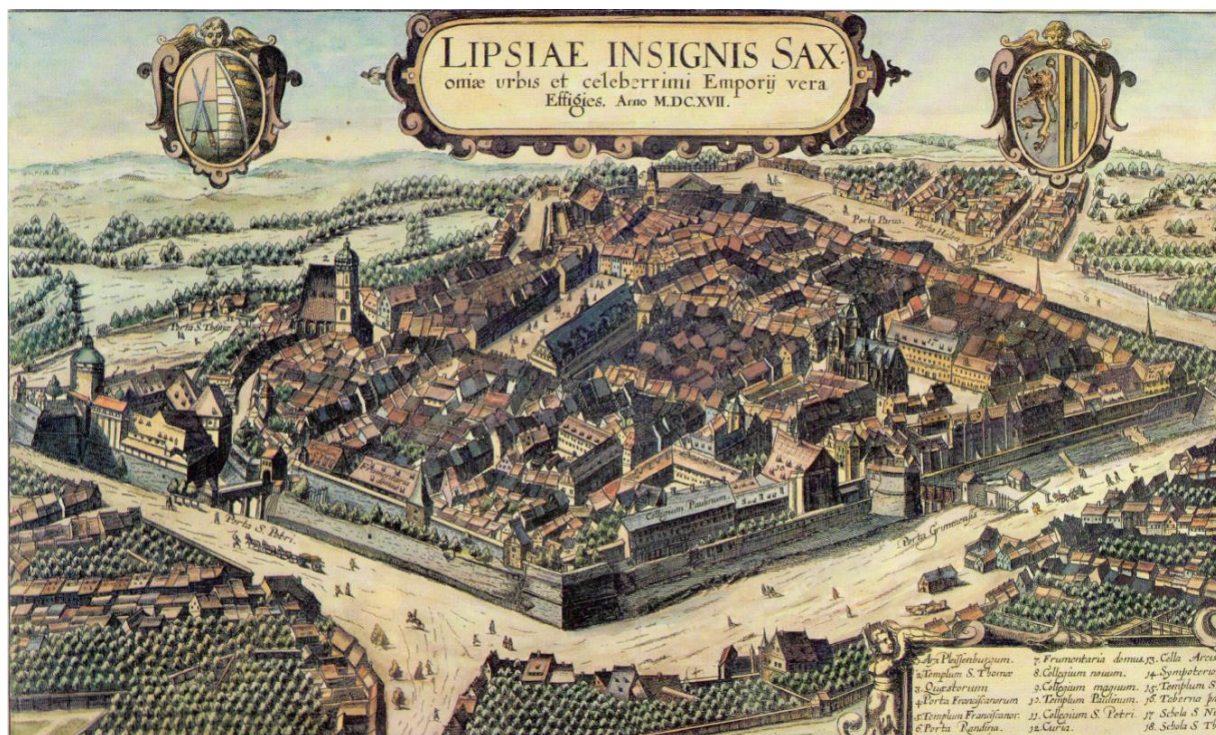
最後の晩餐の席でイエスは「私を裏切ろうとしている者がいる」と言って12使徒を驚かせ、特に気弱なペテロを悲しませます。ユダは銀貨30枚でイエスを売ったが、罪を着せられたイエスを見て後悔し、「イエスを帰せ」と迫るが果たせず、銀貨を投げ捨て首をつって死んでしまう。No.42 のバ

スのアリア ”Gebt mir meinen Jesum wieder,” はユダが投げ返した銀貨が石の床を転がる音が随所に現れて、ヴァイオリン協奏曲の形式をとったこの曲も「名曲だな」と思うばかりです。

民衆はバラバよりイエスを十字架につけると叫び、No.51 のレチタティーヴォ ”Erbarm es Gott!” と No.52 のアリア ”Können Tränen meiner Wangen” での付点音符の連続はムチ打ちの音型を表し、ドッペルコールでの No.53b “Gegrüßet seist du, Jüdenkönig!” 「ユダヤ人の王バンザイ」と叫ばせる。No.59 のレチタティーヴォ ”Ach Golgatha,” ではオーケストラが解決のない属七の和音の連続となり、色々あった末に No.63b の頂点に達する。吉田秀和先生がいわれるように、私もこの2小節が「マタイ」の頂点だと思うのです（絶対に通過点ではない）。マタイ伝を書いたマタイは「彼らは非常に恐れて、本当にこの人は神の子だった・・・といっているのだ」と。この2小節が私にはとてもむづかしいのです。

又、バスパートの音符の数が14個で、これはBach自身の数だから、十字架の足元にBachは自らの名前を明記したのかも知れません。この No.63b を軽々と流してしまうようでは実に惜しいし、情けないと思います。それにNo.67の ”gute Nacht!” も「早く眠ってヨ」というような演奏には絶対にしたくないと願っております。

今回の「マタイ」で私にとって一番の収穫は、ラーゲルクヴィストの「バラバ」(岩波文庫)という本に巡り会えたことです。山田武様のおかげです。本当に有り難うございました。



「17世紀のライプツィヒ」 Braun-Hogenberg による版画、ベルリン美術・歴史資料館蔵

【後記】 H. E 様から2回目となる玉稿をいただきました、有り難うございます。読んでいて誠に心温まる文章で、H. E 様のお人柄がにじみ出ているような気がいたしました。私も1990年、ドイツ統一直後の大阪でヴァインジャーマン先生の指揮するバッハの「クリスマスオラトリオ」を歌い、明るくおおらかで心からバッハを愛しておられる先生の音楽作りに触れた喜びは忘れられません。文中にある「バラバ」は、H. E 様が書かれた楽事通信第24号の文章に触発されて山田様がアマゾンで入手(第26号参照)し、読了後 H. E 様にお貸したものだそうです。(新井治男)